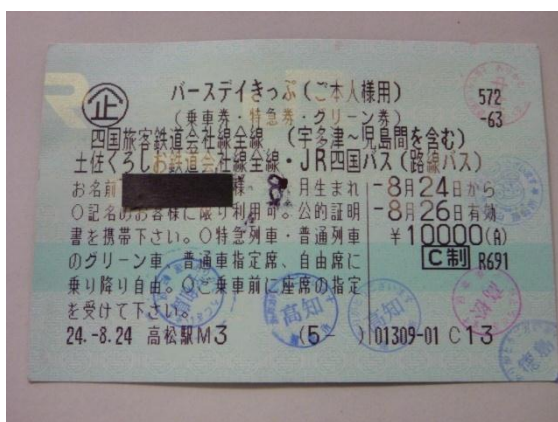


グリーン車でらくらく乗り鉄（自主）鉄道取材その1  
伊予西条：四国鉄道文化館 編

とても暑い日々が続いた 2012 年夏。  
8 月生まれの特典を活かす時がやっとやってきた。  
著者が日本一お得な企画切符だと思ふ “四国バースディ切符”。

誕生日月なら 1 万円で JR 四国管内なら 3 日間乗り放題。特急・普通車自由席、指定席はもちろんグリーン車にも乗れるとてもコスパのよい切符である。また、この切符、土佐くろしお鉄道と JR バスの松山～久万高原（落出）間、土佐山田～アンパンマンミュージアムを



を経て大柘間も利用でき、ほぼ四国全域の移動にもってこいの切符である。更に、この切符の素晴らしいところは同一行程なら本人と同行 3 人まで、同じ特典、同じ価格（1 人あたり 1 万円）で利用できる素晴らしい切符である。この切符を使って、8 月 24 日から 26 日までの 3 日間、グリーン車でゆったりと四国の乗り鉄を楽しみながら鉄道駅の近くある地域活性や自然保護に関する施設やエリアをめぐってみた。

とある国際学術誌から Review の執筆をたのまれ、はや 3 カ月！  
夏頃までにお書きいただければといわれ、引き受けたものの今日までわずか 5 行。  
深夜から早朝まで、机の両脇にうず高く積まれた文献に目を通すのにも飽きてしまい、頭がミルク粥になりそうになったのを契機に列車に乗ることにした。取材と気分転換。  
8 月が誕生日月である筆者が向かったのはワンダーランド四国である。  
18 きっぷを持って、備後庄原 朝 7 時 31 分発三次行き普通列車に乗り込んだ。7 時 52 分塩町で地元高校生であふれた府中行き普通列車に乗り換える。吉舎駅で高校生たちが降り去ったあとビールの栓をあけて、ゆっくりと福塩線を楽しむ。府中からは列車を乗り換えて、電車、つまり電化区間にはいる。  
府中駅 9 時 39 分発 240M 列車、この列車は福山行きだが、福山着後、列車はそのままに列車番号を 1750M と替えて 10 時 25 分に福山をもち、11 時 27 分には直接岡山まで行ける便利な電車である。岡山駅でマリンライナー 27 号に乗り換えれば、12 時 35 分に高松に到着できる。朝、備後庄原を出れば、昼には四国に行ける。午後からはバースディ切符を使った乗り鉄が可能である。  
バースディ切符を高松駅の緑の窓口で購入（購入には生年月日を確認できる公的な ID が必要だが、ID は免許証で充分 OK！）する。その際、次に乗車するグリーン車の予約をしよう。目的地は伊予西条。まず、12 時 50 分、高松発「特急いしづち 15 号」に乗車。



(左図：いしづちの先頭車車内、木製バケットが美しい座席である。乗車したのは自由席だがグリーン席のようだった。しかも自由席の方がすいていた。)

宇多津らは「いしづち」に「しおかぜ」が連結される。早速グリーン車に移動する。



(しおかぜグリーン車内、木彫が美しい)

在来線特急、随一の快適性を誇るしおかぜの車内、特にそのグリーン車内は極めて快適！宇多津～観音寺間は車内販売もあり、またビールとおつまみを購入してしまう筆者でありました。このまま松山まで乗って行きたいほど快適でした。しおかぜ 11 号は定刻通り、14 時 16 分に伊予西条に到着した。



(左図：遠くに西日本最高峰、石鎚山を望む。この駅の1番線横すぐに、本日の取材対象、「四国鉄道文化館」がある。)



伊予西条は西日本最高峰石鎚山のふもとにあたり、清浄な湧水が豊富である。「うちぬき」とよばれる地下水の自噴井が市内にたくさん存在する湧水の街である。その恩恵はこの駅のホームにもある。2番3番線の中央付近に「うちぬき」があり、喉を潤すこともできる。



このホームのうちぬき、地元の皆さんや鉄道利用者にとっても愛されておりまして、筆者がしばらくホームにいた間に何人もうちぬき水を味わいに来ておりました。



筆者も飲んでみましたが、冷たくおいしい湧水でありました。



さて、この駅のすぐ横にある四国鉄道文化館に向かうことにします。

立派な建物で窓や明かりとりも多く、何やら中の展示物が見えております。

「四国鉄道文化館」実は鉄道歴史パーク in SAIJO を構成する交流施設のひとつで、この他にも

新幹線の開通、弾丸列車の開発に尽力し、この伊予西条ゆかりの（第4代）国鉄総裁であった十河信二氏の業績を紹介した「十河信二記念館」、石鎚山系へのエコツーリズムや西条まつりの「だんじり」など西条市の文化紹介と観光情報発信を目的とした「西条市観光交流センター」が駅を出て右側すぐ（下図では駅正面なので左側となる）に隣接して設けられている。



（伊予西条駅正面と鉄道歴史パーク in SAIJO パンフレット）

駅の改札を抜けてすぐ右側（新居浜方面側）にまがり、四国鉄道文化館へと向かう。木組みを建物内外に利用し、こじんまりとした美しく印象的な建物であることが伺える。また、正面や側面には動輪や信号機のモニュメントや湧水の街を象徴したような作りとなっていて、水路が豊富にあしらわれているせいか、とても落ち着いた印象をうける建物である。





(木組みで造られた館の正面だけでなく側面にも水路が及んで、落ち着いた印象がある。この木組みは館の中にもみられる。)



動輪や信号機のモニュメントが館の入り口に設けられている。また、地面の敷石もまるでバラストのように敷き詰められている。

すぐ隣が駅のホームで駅自体もまるで動態博物館のようにつながっている印象をうける。以外に凝ったつくりだと思う。

また、正面には新幹線実現に向けた最大の功労者、十河信二氏の銅像が設けられている。



この記念館に入るためにはまずお隣の十河信二記念館に入って入館料を払わねばならない。直接購入できないので少し面倒ですが、「十河信二記念館」で購入する入場券がこれまた凝ったつくりになっているので、是非、一度手にしてもらいたい。



四国鉄道文化館への入場時には、この入場券が硬券切符として駅の改札を通る時のように改札錠でパンチが入れられるのにもくいの演出である。



四国鉄道文化館の紹介の前に、十河信二記念館にも触れておきたい。まず、その建物内外とも木を多用した心地よい印象をうけ、新館というのもあいまって綺麗で、落ち着いた明るい展示館である。

その内部には十河信二氏の経歴、偉業などを展示したスペースとなっており、鉄道振興に功績のあった氏にゆかりの品々が見られるようになっている。また、この伊予西条には十河氏のみならず近畿日本鉄道総裁として活躍し、特急ビスタカーの生み親として



活躍された佐伯勇氏（西条市丹原町にて生誕）の偉業についても掲示されている。十河信二記念館の前にはレンタサイクルも用意されており、打ち抜き・西条湧水の市内巡りポタリングの足としても活用できそうである。時間があれば是非とも利用したいのであるが、ちょっと時間が迫ってきた。館の見学を終え、次ぎは早速、四国鉄道文化館に入って行く。



前述したように入館の際、硬券切符のような入場券にパンチを入れてもらい入場する。

正面には検査車庫に入線したように控える2両の列車。

新幹線0系とディーゼルカー(気動車)天国の四国各線で活躍したDF50ディーゼル機関車が動態保存しながらに展示されている。





近くで見るとかなりの迫力！



木組みの内部が独特の落ち着きとかつてどこの機関区にもあった検査用車庫にいるような錯覚を感じさせる造りである。展示車両についてはその周囲と内部まで見学可能である。

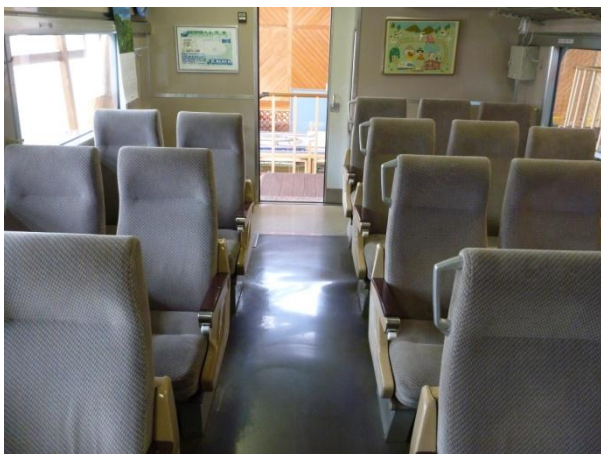


DF50 01 の運転室の内部



DF50 の側面も開けられており、日ごろ見れない、ディーゼルエンジンの構造も見学できる。個人的にはこれが一番おもしろかった。列車のエンジンはすごい！

0系新幹線は後ろから入場する。  
まずは2x3列のシート



走行音とアナウンスが流れる車内。なぜかその匂いが懐かしい。東京&北陸いたとき出張でよく使ったあの感覚がよみがえった。





0系新幹線の運転席。 以外に高い位置にある。

鋼鉄・リベット打ち、当時の技術の粋が感じられる。今の新幹線とは違う無骨さがかっこいい！

さて、この四国鉄道文化館にはこれらの車両とその解説展示物の他にも四国の鉄道の歴史や鉄道に関する備品（現役特急 8000 系：しおかぜのパンタグラフ、かつて四国を走った列車のヘッドマーク、列車の運行に使われたタブレット閉塞器）や鉄道員の制服などが展示されており、飽きない展示構成である。また、0系新幹線の裏側には鉄道模型のジオラマがあり、子供たちにも人気であった。



駅前で手短に見学でき、列車や展示物をよく観察できるとも素敵な展示館であった。また、窓も多く取られ、特に、駅ホーム側はすぐ隣が実際の伊予西条の駅ホームでもあり、すぐそばを通る列車との臨場・一体感がすばらしい。

そろそろ時間が迫る。

このような展示館の成立には地域の理解のみならず産業・文化遺産の保護活動との連携が欠かせない。この展示館もナショナルトラスト事業（日本ナショナルトラスト）の一環として取り組まれているようである。近畿、四国では盛んに事業が展開されており、筆者も



一度行ってみたい長浜駅に隣接する長浜鉄道文化館や北陸線電化記念館などもこの事業によって行われたものである。この事業、単なる「箱モノ」事業ではなく、その建物が立地する地域の街づくりの拠点となるヘリテイジセンターとしての活用を目的に行われている。筆者の居住地、広島では世界遺産の登録に対して、かつて盛んに注目を浴びたことがあったが、結局は観光や経済振興が中



心になってしまい、街づくりの観点がどこかに行ってしまった感が否めない。この事業では、産業遺構・文化遺産を受けづく街（拠点）をつくりながら、観光も振興させようという一貫した考えがあるところがすばらしいと思う。

(トラスト事業やヘリテイジセンターについては下記の URL を参考にしてほしい。)

(<http://www.national-trust.or.jp/heritagecenter/heritagecenter.htm>)

(<http://www.national-trust.or.jp/index.html>)

また、公のみに頼るのではなく、地域住民やパッセンジャー（地域外者、旅行者）にも参加を求めるところも下支えの大きな事業となりうる。ここに至って筆者は思うのである。芸備線、「鉄道による陰陽連絡の歴史遺産」、備後落合駅の活用ができないものかと。地図&HPによれば中国地域にはこれまで全くナショナルトラスト事業がないことも残念だが、平和や文化を標榜する県が地域遺産を積極的に残したり、評価しようとしめないのも悲しく思う。「芸備線」「神楽」「たたら」「ヒバゴン」「スイッチバック」etc. 奥出雲と奥備後で合わせ技！可能性は低くない！



さて、筆者の思いはともかく、来館中、夏休みということもあってか小中学生や親子づれかひっきりなしに来場していた。



(しおかぜ号の窓から (目立つ!))



(鉄道のみならず車でも来場できます。)

ディーゼルカー (気動車) を孫に語るおじいさんの姿が印象的だった。  
(知 (ソフィア) の継承は教育の最大の目的である。人はそこを学校という。)  
館の外に出てことさら印象的だったのが、本線から伸びる 1 本の線路!!



この線路、鉄道用地を越えて、館の  
駐車場を横切り、なんとなんと!



館内 (あの DF50) へとつながっているの  
である。展示されている列車は静態保存、  
単なる展示物だけでなく、鉄道として「生  
きている」ことの証を見ることができた。



約40分と短い時間であったが、たつぷりと四国鉄道文化館&十河信二記念館を堪能できた。もう少し滞在したいが次の列車の時間がせまる。後ろ髪ひかれるおもいであったが、とな



りの西条市観光交流センターに向かった。センターの中には西条市の文化・観光に関する案内や紹介ブースの他、センター内の一角に市のシンボルともいえる「うちぬき水」がここにもあった。



(外にはここにもレンタサイクルがあった。)

センター内は、案内ブースがあり、その奥に「うちぬき」、ぼんぼりをくぐってとなりには休憩所





を兼ねて、西条の名産品と（石鎚山も含む）名所の紹介スペースがあった。そしてさらにその奥には、西条祭りの主役、「だんじり」がどっどと（ドカーンと）！！展示されていた。



「だんじり」といえいえば筆者の出身地である大阪泉州には岸和田のだんじり祭りがあり、やりまわしと呼ばれる男たちによる勇壮な山車の取り回し（曲がり角の高速転回）が有名である。



この伊予西条でも毎年10月中旬に西条祭りがあり、だんじり（山車）が奉納され勇壮な姿をみることができる。祭りでは各地区による山車が奉納され、豪華かつ華麗な「だんじり」の数々が見られるそうである。

「だんじり」に見とれて列車の時間がホントに迫ってきた。そそくさと西条市観光交流センターを後にする。

伊予西条はほんとに石鎚山（四国山）の恵みである湧水にあふれるとても魅力的な街であった。街のシンボル「うちぬき」は駅のホー



ムにも、観光センター館内にも、駅前にも、そして市内の至る所にある。



また、伊予西条は現在 JR 四国、予讃線の基幹駅でもあり、しおかぜ号が停車し、多くの列車が行き交う。

湧水地の微生物を研究対象とする筆者にとっても、とても魅力的な街である。今度は湧水地サンプリングにじっくり来ようと思う。乗継までの短い間、再訪を誓う筆者であった。

この後は今治で駅弁買って遅い昼食にしよう。

その2に続く。